



はれるんマガジン

～気象・地震に関わる素朴な疑問に答えます～ 発行：福岡管区気象台

今月の素朴な疑問

夏の入道雲で注意することは？ -過去の災害事例に学ぶ-

夏の午後に内陸を中心に発生する入道雲は、発達した積乱雲(かみなり雲)で激しい現象を伴います。雷、急な強い雨に気をつけるほか、竜巻などの激しい突風にも注意が必要です。過去の災害事例を知っておくことが身を守ることに繋がります。

九州北部地方(山口県を含む)は7月13日に梅雨明けし、毎日暑い日が続いています。梅雨明け後の夏といえば、「夏休み」を思い浮かべる人が多いかもしれませんが。夏から連想するものは他にもたくさんありますが、真夏の空のイメージは、青空にもくもく盛り上がった真っ白な入道雲ではないでしょうか。よく写真などで見る入道雲は遠くから見ているので真っ白に見えますが、雲の下では太陽の光があまり届かないため黒っぽく見え、急な強い雨や雷、突風などの激しい現象を伴います。



夏は山や川に遊びに行くこともあると思います。朝は晴れていい天気だったのに午後になると空が急に暗くなりゴロゴロと雷が鳴る。そんな経験をしたことはないでしょうか。そんな時は、まさに自分のいる場所の真上で積乱雲が発達しています。雷が鳴るということは、氷の粒ができるほど高い所まで雲が伸びている証拠です。急に発達する積乱雲によって災害にあわないためには、過去に起こった災害について知っておくことが役に立ちます。以下に二つの例を紹介します。

最初は、2008年7月28日の兵庫県神戸市の都賀(とが)川の事故です。川の上流で短時間に激しい雨が降ったため、ほとんど雨の降っていない下流で急に1メートル以上も水かさが増して、子供を含む5名が犠牲になりました。水かさが増すといっても鉄砲水のような急激な増水の仕方だったといえます。この川の周辺は阪神・淡路大震災の後に整備されて市民の憩いの場となっていました。

このような激しい雨をもたらず積乱雲はどこで起きるか予測できませんし、起こり

始めると急に発達するので警報や避難情報は間に合いません。自分たちでできる対策としては、この例のように川のそばにいるときは、上流方面の空の様子や天気にも注意しておくことです。また、日差しの強い日の午後などは、レーダーによる雨の強さと場所をときどき確認することも有効です。

次に、ちょっと古いですが有名な落雷事故です。今から54年前の1967年の8月1日に、長野県で登山中の高校生の列に雷が落ちて、一度の落雷で11人が亡くなるという惨事がありました。雷は基本的には高い所に落ちますので、近くに木があればそちらに落ちますが、このとき高校生たちは、木のない岩場の尾根を一行で歩いてきたため、避難する術がありませんでした。この事故からの教訓は「山の頂上、尾根、岩場から出来るだけ早く遠ざかる」ことです。

雷が接近していることがわかったら直ちに安全な場所に避難する必要があります。一般には金属で囲まれた中は安全とされていますので、車や鉄筋コンクリートでできた建物の中は安全といえます。なお、近くに木があっても雨宿りは危険です。木に落ちた雷が途中から人間に飛び移ることがあるからです。木の幹、小枝、葉先から2メートル以上離れることも言われますが、雷雨のときは高い木には近付かないことです。

入道雲(積乱雲)はいつどこで発生するか前もって予測はできませんが、発生しやすいかどうかは、テレビや新聞などのキーワードから知ることができます。天気予報で「午後は所によりにわか雨や雷雨」、さらに「上空の寒気」、「大気不安定」などの言葉が使われると、入道雲が発生しやすいサインです。屋外で川遊びなどに夢中になると、周囲の状況をあまり気にしなくなりがちですが、自然の中に身を置いたときには体で感じる危険のサインも大事にしたいものです。こういった感覚を養うためにも、普段から空の様子や変化に興味を持っておくことが必要でしょう。

ご意見をお待ちしています

お気づきの点があればご意見をお寄せください。また、素朴な疑問や質問を募集します。電子メール、Fax、あるいは郵便(はがき、封書)で下の宛先までお送りください。お待ちしております。

問合せ先

〒810-0052 福岡市中央区大濠 1-2-36

福岡管区気象台防災調査課はれるんマガジン編集部

電話：092-725-3614

Fax：092-725-3163

e-mail：fukuoka_bousaichousa@met.kishou.go.jp

次回の発行は9月の予定です。